JASE
現代性教育研究ジャーナル
MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2024年
No. 165
2024年12月15日（毎月15日）発行

日本性教育協会
THE JAPANESE ASSOCIATION FOR SEX EDUCATION

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-3冨山房ビル５階 Tel.03-5801-6788 Mail info_jase@faje.or.jp URL https://www.jase.faje.or.jp 発行人 石川哲也 編集人 小澤洋美
© JASE. 2024 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

SEE性教育アカデミー 2024･報告 ･････････････ 1
第９回UNESCOユースセミナー･プレイベント
講演会･報告･････････････････････････････････ 5
第９回UNESCOユースセミナー体験記････････ 9
"めぐみ"を生きる⑨ ･････････････････････････ 13
わたしたちの性教育アクション㉑･････････････ 14
多様な性のゆくえ㉒･････････････････････････ 15
今月のブックガイド･････････････････････････ 16
JASEインフォメーション ･････････････････････ 17

◉大阪公立大学ゲストプロフェッサー公開講座／ SEE 性教育アカデミー 2024・報告

高齢化とセクシュアリティ
Aging and Sexuality

はじめに

10 月 13 日（日曜日）、大阪公立大学女性学研究センターとの共催で、大阪公立大学 I-site なんばで「高齢化とセクシュアリティ（Aging and Sexuality）」をテーマに SEE性教育アカデミー2024が行われた。今回のセミナーは、2024 年 10 月の１か月間、大阪公立大学ゲストプロフェッサーとして来日しているクロアチア共和国ザグレブ大学社会学部教授のアレクサンダル・シュトーホフェル博士をゲストに迎えた「大阪公立大学ゲストプロフェッサー公開講座」でもあった。

SEE（Sexuality Education & Empowerment）は、これまで概ね年２回のペースでセミナーを開催している。From What to Learn to How to Learn（何を学ぶかから、どう学ぶかへ）をモットーに、受講者との対話を重視したプログラムを展開している。講義内容に関する質疑応答だけでなく、ディスカッションや「ふりかえり」の時間を十分にとり、講師と参加者が共に学ぶスタイルをとっている。

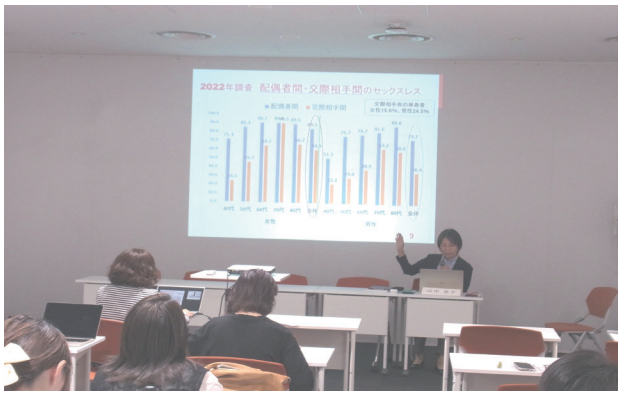
プログラムは、10 時からのオンライン同時配信のシンポジウムと、13 時 30 分からのシンポジウム参加者のなかから出席希望者とシュトーホフェル氏およびシンポジウムの指定討論者の青山薫氏（神戸大学教授）を交えてのディスカッションの２部制で行われた。

シンポジウムは、司会の東優子氏（大阪公立大学教授、SEE 共同代表）の「セックス・エリート 12 の条件」という、偏見をあぶり出すブラックユーモアから始まった。

◆報告１◆
日本国内におけるこれまでの調査研究で見えてきたこと

シンポジウムの最初の報告は、「日本国内におけるこれまでの調査研究で見えてきたこと」。具体的には「日本における中高年の性――2022 年中高年セクシュアリティ調査――」を中心に、調査から見えてきたことを山中京子氏が報告した。

山中氏は、大阪公立大学名誉教授で、日本性科学会



山中京子氏の報告

有志によるセクシュアリティ研究会副代表、コラボレーション実践研究所所長を務めている。

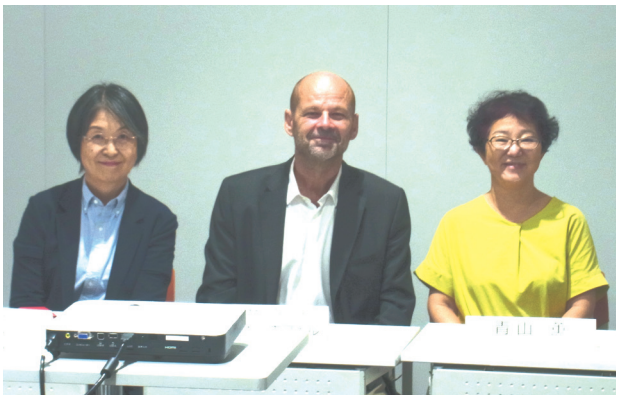
今回の発表は、副代表を務める日本性科学会有志によるセクシュアリティ研究会の調査で、主に中高年のセックスレスに焦点を当てたものであった。日本性科学会有志によるセクシュアリティ研究会は、1990 年に研究会の代表である荒木乳根子氏が老年期のセクシュアリティを調査したことを端緒に、産婦人科医、心理職などの有志で設立された研究会で、2000 年、2003 年、2012 年、2022 年に調査を実施してきている。

今回の報告の中心になった最新の 2022 年調査は、全国の 40 歳から 80 歳代のモニターを対象にインターネット調査を実施したものである。

山中氏は、調査から見えてくる「なぜセックスレスになっているのか」について、次のようなことを挙げている。

- 女性にとって性交渉が十分に満足感／喜びが得られるものになっていないのではないか。性交渉の魅力がなければ、女性が積極的に性交渉を持ちたいと思わなくなるのではないか。
- 男性と女性で相手との望ましい性的関係に求めるものがずれている。
- 配偶者間では、性的感情や欲求を伝えるコミュニケーションが不足しており、性交渉の前段階でのコミュニケーションに課題があるのではないか。
- 配偶者間では、中年は仕事と子育てで多忙感、疲労感があることがセックスレスになる理由の一つではないか。そこで一度セックスレスとなった後に、高年になって再び性交渉を開始することが困難になるのではないか。

山中氏は、今後への提言として次のように語っている。「長い人生、日本人の平均寿命が女性 87.1 歳、男性 81.1 歳という状況の中で、個人として、またカップルとして、どのように生きていくかを考えるとき、性の快感・快楽・喜び・楽しさ、セックス・プレジャーから生じる身体的・心理的満足感と楽しさが得られることは、人生を豊かにする一つの方法ではないか。


左から山中京子氏、アレクサンダル・シュトーホフェル氏、青山薫氏

その意味で、セックスレスの原因やその状況の改善方法を検討することは意義がある。カップルにおける性に関するコミュニケーションを改良すること、性交渉全般の知識や技術を提供する機会を増やすこと、性に関する主体性を養うこと、労働や子育てに関するシステムを強化することなどでの取り組みが求められていると考えている」と、報告を締めくくった。

◆報告２◆
欧州における調査研究から見えてきたこと

山中氏の報告に続いて、シュトーホフェル氏が欧州における調査研究「ポジティブな性的加齢とは何か――ヨーロッパ多国間研究の成果――（Assessing Positive Sexual Aging:Finding from a Multi-Country European Study）」をテーマに、これまでの先進西欧諸国の研究動向と自身の調査研究から見えてきたことについて報告した。

シュトーホフェル氏は、PubMed データベース（世界の主要な医学系雑誌に掲載された論文の書誌情報を調べることができるデータベース）に収録された論文が 116 本ある性科学者で、欧州性科学連合ゴールドメダル（2016 年）を受賞している。また、セックスセラピストでもある。

「なぜ加齢に伴うセクシュアリティの研究をするの

アレクサンダル・シュトーホフェル氏の報告

か」の説明から報告を始めた。その理由を整理すると次のようになる。

- 先進西欧諸国における人口動態の傾向と加齢に伴うセクシュアリティの関連の研究が必要。
- 利用可能なデータは、多くの人々が年齢を重ねても無性愛者（asexual）にならないことを示しており、性的健康や性的表現に関連するニーズがあり、教育が必要とされている。
- 高齢者の個人やカップルと関わる専門家（性的健康サービス、老人ホームなど）に情報を提供し、意識を高める必要がある。
- 理論的モデルと前向きなデータが欠如しており、ポジティブな性的加齢（sexual aging）の背後にある心理社会的メカニズムとは何かの研究が求められている。

その後、先進西欧諸国の研究者たちが、「加齢と性」について、どのようなことが判明、または判明していると考えているかを紹介した。

整理すると以下のような項目が挙げられる。

①性的活動は年齢と負の相関関係にある。これは年齢に伴う性的機能の低下と関連している。しかし、かなりの割合の高齢者が活動的であり続ける。

②性的に活動的であり、性的活動が重要であると信じる高齢者の割合は、増加しているように見える。

③高齢の女性は同年代の男性よりも性的に活動的でないと思われているようだが、加齢における性の重要性の評価は性別による違いではないと考えられる。

④高齢者のカップルにとって、触れ合い、抱擁、非挿入的な快楽など、情緒的な親密さ、コミュニケーションなど、結びつきの質の変化が重要であることが分かってきた。

⑤性的機能に対する苦痛や身体イメージの不満は、高齢になると低下する。

⑥年齢とともに性的満足度の減少が見られるが、高齢者の約半数は自分の性生活に満足している。

⑦性的満足度の性差は、年齢とともに薄れる。

⑧高齢者における性への態度、つまり年齢による偏見や差別（エイジズム）は、性的表現や活動、性的満足度と関連している。

⑨セクシュアルヘルスの悩みを相談する高齢者は、稀（まれ）である。

これらの研究成果を踏まえ、シュトーホフェル氏は、自身の研究内容の一つ「高齢者における性的ウェルビーイングの測定」を報告した。

以下のような測定結果があったという。

- デンマークを除いて、男性がやや高いが、性的ウェルビーイングについて大きなジェンダー差はない。
- ウェルビーイングは一貫して主観的な健康評価と関連があった。
- ジェンダーと国を超えて、性的ウェルビーイング、性的活動の頻度、情緒的な親密性との一貫した関連が観察された。

続いて、現在進行中であるという「性的サクセスフル・エイジングの測定」の測定内容を紹介して報告を終えた。

サクセスフル・エイジングとは、「よりよい人生を送り、天寿を全うする」ことを意味する言葉で、「エイジング（加齢）」を「老化」ではなく、「熟成」ととらえる概念。

その後、青山薫氏（神戸大学教授）が、指定討論者として登壇した。

セックスレス状況とその理由の分析について焦点を当てた山中氏の発表と、シュトーホフェル氏による先進西欧諸国の性的にアクティブな高齢者に焦点を当てた研究・分析の発表についてコメントした。

性的にアクティブではない人たちについての山中氏の調査研究、シュトーホフェル氏の性的にアクティブな人たちの分析という対照的な発表について、「結果についての得心と関心」についてと題してパワーポイントで示し解説した。

参加者からは、青山氏のコメントに次のような感想が寄せられている。

- 青山先生の指定討論によって、２つのご報告の理解

が深まりました。より根源的に、セクシュアリティとは何か、異性間のジェンダー不平等な規範や文化が前提にある以上、いま一度考えていきたいポイントをいただけたように思います。

- セクシュアリティについては、若者の性について語られることが多い中、高齢化とセクシュアリティというテーマで中高年の性についてスポットを当てたご発表、とても興味深く拝聴いたしました。青山先生の論点整理のコメントも報告者の先生のご発表の整理と振り返りに大変役立ちました。

ディスカッションと参加者からの声

13時30分から、希望者を対象に、午前中の報告に関連したディスカッションが行われた。

ディスカッションは、午前中の報告者と対面するスクール形式の座席から、参加者全員が円形に座る方式に替えて、自己紹介から始まった。

自己紹介終了後、参加者から「西欧諸国での異性愛者でない高齢者のセクシュアリティに関する研究」についての質問あった。

シュトーホフェル氏は、ヨーロッパの6か国（ポルトガル、イタリア、スペイン、ポーランド、ドイツ、ノルウェー）で高齢者のセクシュアリティに関する研究実績はあるが、異性愛者でない高齢者を研究した実績があるのはポルトガルのみであると報告した。午後のディスカッションは、そのことについての議論を中心に進んだ。

なぜ、他の国々では研究が行われていないかについて、政治的、宗教的、文化的な因子が影響しているのではないかと、それぞれの国の状況についてシュトーホフェル氏は解説した。

最後に、今回のセミナーの終了後に寄せられた参加者からの声の一部を紹介する。

- 日本ではなかなか語られない高齢者のセクシュアリティのお話を科学的な視点から学ぶことができ、思春期だけでなく、どの世代に対しても性教育のような場が必要であるということに共感し、そのような活動を視野に入れていきたいと考えました。学生さんの通訳もかっこよくて、素晴らしかったです。
- ２つの別々の場所での、ベクトルの違う調査研究の発表を対比することが出来たのは、とても興味深かったです。

午後のディスカッション

- 興味深いお話でした。老年学とセクシュアリティ（性研究）はもっと互いを必要としている、という指摘。市民レベルで今日の内容をかみくだいてお話ししてくださる講座があると良いと感じました。
- とても興味深く拝聴させていただきました。「高齢者への性教育も必要」と言われていましたが、今日の内容から私も同じように感じました。今後、高齢者への性教育も進んでいけばと思いました。
- オンライン視聴させていただきありがとうございました。山中先生のご発表、経年で比較をしたことで発見できた事実が興味深く、また考察で述べていらっしゃった点も得心がありました。臨床（女性のサイドからの夫婦関係）に役立てたいと思います。
- 高齢異性愛者のセックスについてのお話ということで、一点気になったのは、疾病や障害の有無が性行動に影響することはないのだろうか、ということでした。意欲的な問題のみならず、フィジカルな側面から、セックスをするという状況にない人は高齢層になればなるだけ増えるのではないだろうか、と思いました。ジェンダー規範的な視点や、メンタリティに重きを置く調査が多いように感じたのですが、セックスということだけを思うと「セックスはスポーツ」とも言われるくらい、体力消費が多いと思うので（高齢者の性教育、というところで解決できるものもあるかもしれませんが）フィジカル要素で性交を避ける原因があるか、知りたい気がしました。興味深いご発表ありがとうございました。

※参加者、対面25名、ウェビナー44名。

協賛：日本性教育協会　　（文責・編集部）